

人と人とのつながりを大切にしています

文化政策課 飯山 淳二（一般事務 昭和63年度採用）

小田原市役所を志望したきっかけ



初めて「小田原」を具体的に意識したのは、高校生のときでした。小田原から遠く離れた学校に通っていましたが、仲間たちから「小田原は静岡県」と言われたときにはショックでした。「みんな、小田原を知らないんだ」と。でも、その仲間に小田原のことをうまく説明できなかつたのです。その時から、自分の生まれ育った小田原を客観的に見るようになり、住んでいると気付くづらいまちの魅力に惹かれていきました。そして、小田原のために働いてみたいという気持ちが生まれました。

現在の仕事内容

私の所属しているのは「文化部文化政策課文化交流係」。「文化」のカバーする分野は多岐に渡りますが、私の柱になっている仕事は「国際交流」と「音楽」です。

アメリカ・チュラピスタ市とは30年、オーストラリア・マンリー市とは20年を超える長い年月、青年・生徒の相互交流を行っています。お互いの家にホームステイをしながら、夏休みのほとんどを過ごします。

私も「ときめき国際学校」の引率者として、マンリー市に20人を超える生徒とともに3度も訪れました。現地のスタッフの家にホームステイをすることで他国の文化を感覚として理解できます。これは決して「旅行」では体験できるものではありません。

一つ屋根の下でいっしょに何日間も過ごした友人は、かけがえのない存在になります。それが外国人となると生徒たちの世界観は一気に広がり、世界が自分の舞台になります。そうした素晴らしい体験を生徒たちと共有できます。その結果たくさんの「国際人」が小田原から巣立っているのです。

音楽を通じた文化振興とまちの活性化にも取り組んでいます。毎年秋に行っている「小田原城ミュージックストリート」は、出演者が100組を超え、1日で行う野外音楽イベントとしては県下最大規模になりました。おそらく全国的に見ても有数の規模であると自負しています。また、年に1度だったイベントも、最近では商店街などから声がかかるようになり、小さいイベントを月に1度は行っています。こうして、応募者は年々増え続け、新しい文化が小田原に根付きつつあるのを感じています。出演者はもちろん、裏方の我々も楽しんでできるイベントにすることを心がけています。



マンリー市役所の前で(2011年8月)

仕事のやりがい

市の仕事の中でも消防や病院は人の生死に直結し、福祉の仕事は生活の根底を支えています。そのような中で私が携わっている文化の仕事は、ややもすると「市役所の仕事ではないだろう」とまで言われることもある分野です。

しかし、人々の心のよりどころになるのは人と人とのつながりであり、芸術文化です。自分の仕事から、言葉の壁を越えて人は理解しあえるということ、音楽はすべての人に平等であることを教えられました。

私は、人間の心を支える仕事をしているという誇りを持って業務にあたっています。「やりがい」という言葉は、仕事の中にあるのではなく、自分の中に作っていくものなのだと思います。

受験生の皆さんへのメッセージ

もし、あなたの志望理由の本心が「市役所は安定しているから」というものであれば、受験すべきではありません。市役所の仕事には、企業ではできないことが数多くあります。そして、それらがどれも市民とその生活に直結しています。そういう魅力ある職場です。大きな志を持って受験していただきたいと思います。